



さくら通信



Hoju
Group
宝樹会

No.11

2019

宝樹会によるウィーン発の浄土真宗会報誌

「道を求める心」これまでの重要点箇条書き

*雪山童子..... 若い頃の御釈迦様

*帝釈天..... 天人

*天人..... 仏教が生まれる遥か何千年も前からのインドの思想、土着の考えの中に存在。仏教は、それに、仏教を守る守護神、仏教を守護する役目を担わせて、自らの考え方の中に取り入れる。

*羅刹..... 帝釈天が雪山童子を試すため姿を変えた恐ろしい形相の醜い鬼

*偈..... 「うた」

*前の半偈..... 諸行無常 是生滅法

*後の半偈..... 生滅滅已 寂滅為楽 雪山童子はこの半偈を聞くため、自分の身を羅刹に捧げる約束をする。



木のもとのお話(11) 煩惱

御釈迦様もお分かりになったように人間は煩惱でできています。「煩」は「わずらう」「わずらわす」。「惱」は「なやむ」「なやます」。私達人間は皆、煩惱と共に生きています。煩惱のない聖者や超人にはなれないのです。御釈迦様のお教えによってその自分自身がわかってきます。

道を求めるころ (8)

雪山童子の求道

岡本英夫

「いよいよ身を捨てる時、童子は次の願いを起こした。「願わくば一切の慳惜(けんじゃく)の人にここへ来てもらって、私がこの身を捨離(しゃり)するのを見せたいものだ。小施(しょうせ)をもって高き貢(みつぎ)とするものに、私がたった一偈(いちげ)のために草木を捨てるようにこの身を捨てる、この姿を見せたいものだ。」童子はこう言い已(おわ)って身を空中に放ち自ら樹下(じゅげ)に投じた。」

1) 悟り 真実とは何であるかを明らかにすること。御釈迦様は、真実とは一切衆生を救う大慈悲であると明らかにしました。

身を投じますが、しかし、その身は羅刹の口には入りません。

「身が下がって未だ地に至らないうちに、虚空の中で種々の声を出した。その声は色究竟天（しきくきょうてん）に至った。その時、羅刹は元の帝釈天（たいしゃくてん）の身に復し、空中において童子を摂取し、平地に安置した。帝釈天や大梵天王（だいぼんてんおう）をはじめとした諸天人は童子の足下に稽首頂礼（けいしゅちょうらい）し讃えて言う。

「善い哉善い哉、汝は真の菩薩である。無量の衆生を利益して、無明黒闇の中において大法炬（だいほうこ）をともしんと欲している。あなたは未来において必ず無上菩提（むじょうぼだい）を成就なさるであろう。その時はどうか私どもを済度（さいど）してくださるようお願い申し上げます。」そのとき帝釈天と諸天は童子の足に頂礼し、辞して去り、忽然として姿を隠したのである。」

身を投げて下に落ちる前に、羅刹がもとの帝釈天の姿に変わって、落ちてくる童子を空中で抱きとめて下に置く。そして、帝釈天や他の天人達も皆集まって、あなたは将来無上菩提を成就する人となるでしょうと。無上菩提、即ち最高の悟り(注1)を開くお方になると。もしあなたが無上菩提を成就なさったら、どうか私達にその教えを説いてほしいと、このように天人達がお願いをするというところでこのお話は終わるのです。

若干省略をしたところもありますが、ほぼこのような内容だと思います。

このお話は仏教では有名なお話ですから、よくお聞きするのですが、実際、経典を見れば少し違うところもあるようです。

羅刹が腹が減って言えないのに、童子が教えてくれと迫る場面があります。それに対して羅刹が、おまえは自分の都合しか考えないと言って童子を叱り問題点を突きます。私はこの内容は聞いたことがありませんでした。ところが経典を読んでみると、そのようになっている。なかなか面白いですね。まさに童子は私たちと同じ人間だという感じがしました。

さらに、全体を通して、具体的な箇所については、いろいろな理解ができるだろうと思います。自分であれこれ考えてみるのは楽しいものですね。

(続く)

